

ボール投げゲームにおける「健康」領域と 低学年体育の幼小接続カリキュラムの課題

—— シュートボール教材に着目して ——

Curriculum Issues in Connecting Childhood “Health” Domain and Elementary School
Physical Education in Early Grades Concerning a Ball-Throwing Game

—— A Focus on the Shooting Ball as Educational Material ——

久我アレキサンデル
Alexander Kuga

玉腰 和典^{*1}
Kazunori Tamakoshi

加納 裕久^{*2}
Hirohisa Kano

I. 研究の背景と問題の所在

1. 幼小接続カリキュラムの動向

日本の学校体育では、スポーツの「する、みる、支える、知る」といった多様なかかわり方をふまえ、豊かなスポーツライフを実現する主体者の育成がめざされている（文部科学省，2017）。このような体育科の目標を達成するためには、発達段階に応じた身体運動文化に関する学習を組織する体育カリキュラムの編成がもとめられ、学校段階間の接続が課題とされている（中央教育審議会，2017）。とりわけ近年は、幼児期と児童期の連携・接続を充実させる政策的な動向がみられる（福元，2014）。

幼児教育と小学校教育の接続を充実させる具体的な施策としては、「幼小接続期カリキュラム」が推進されている。「幼小接続期カリキュラム」とは、5歳児を対象にして、幼児期の学びが小学校の生活や学習で生かされるように工夫する「アプローチカリキュラム」と、小学校入学後に実施される合科的・関連的カリキュ

ラムである「スタートカリキュラム」を意味する（国立教育政策研究所幼児教育研究センター，2015）。そしてこの2つのカリキュラムをつなぐ視点として、「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」が提起されている（文部科学省，2007b）。つまり、幼稚園等においては目標とする姿を想定したアプローチカリキュラムの編成、小学校においては幼児期で獲得された姿を想定して、接続性をもつスタートカリキュラムの編成がもとめられている。

この幼小接続期カリキュラムの中心は生活科等ではあるが、各教科においても幼小接続を意識した編成がもとめられるようになってきている。体育科教育については、2017年改訂学習指導要領において、低学年の内容として、「体づくりの運動遊び」や「器機・器具を使っての運動遊び」のように、「運動遊び」が位置づけられている。また、幼児期で獲得される「多様な動き」を小学校で発展させるべく、「体づくりの運動遊び」においては、「多様な動きをつくる運動遊び（体のバランスをとる動き、体を移動する動き、用具を操作す

※1 明治学院大学

※2 愛知県立大学客員共同研究員

る動き、力試しの動き)」がふくまれている（文部科学省，2017a）。

幼児期の学びと児童期の学びを接続する観点に立つならば、実践的な課題を検討していくことは今日的課題であると思われる。しかしながら、文部科学省（2013，2019）による幼小接続に関する実態調査では、「年数回の授業，行事，研究会などの交流はあるが，接続を見通した教育課程の編成・実施は行われていない」（進捗状況ステップ2）という回答が，2010年度は62.1%，2019年度は50.6%となっており，幼小接続の教育課程編成は，改善されつつも継続的な課題となっている。このような現状を踏まえ，各教科において幼小接続カリキュラムを編成するためには，より具体的に，教材レベルでの課題を検討していくことがもとめられていると考えられる。

2. 幼児期におけるボール運動の発達課題

近年においては，子どもの体力・運動能力は低年齢の時期から発達の遅れがみられるようになり，幼児期からの身体活動の重要性が指摘されている（中村ら，2011）。中村ら（2011）は，1985年と2007年の幼児における基本的動作（疾走，跳躍，投球，捕球，まりつき，前転，平均台移動）の水準を比較したところ，1985年の年少児と2007年の年長児が同様の水準であることを報告している。また，体力・運動能力の中でも問題としてあげられるのが，投能力の低下や投動作の未発達である（春日ら，2014；スポーツ庁，2015；宮口・出村，2016）。投能力においては，1970年代から1990年代後半にかけて急速に低下し，2008年までほぼ横ばいの状態が続いている（森ら，2010）。投動作や捕球動作は加齢によりある程度発達していくものと考えられるが，ボール運動の経験によるところが大きく影響する。したがって，投動作の未発達は幼児期に留まらず，その後の児童期にも影響すると考えられる。これらの動作発達の低下の要因として，室内遊びの充実や習い事など生活環境の変化によりボールを使った遊びの経験が20年で減少したことが考えられる。

投動作の発達については，宮丸（1980a）や中村ら（2011）の幼児期を対象にした研究が挙げられる。これらの先行研究における投動作の発達段階のキーカテゴリーは，腕，脚，体幹のそれぞれの動作および体重の移動が示されており，幼児期の投動作の発達を評価する指標とされている。主に腕や体幹のひねりのみで投射する初歩の動作（パターン1・2）から，投射腕

と同側の足のステップ（パターン3），逆側のステップ（パターン4）へと移行し，最終的に体重移動からのスムーズな投動作（パターン5）へと発達する過程が示されている（図1）。これらは立位での投動作の発現から熟練した投動作までの発達を示すものであり，幼児に限らず，児童期以降の投動作の発達指標にもなるものである。これらの発達段階が幼児期のどの年齢で現れてくるのか，経験による個人差はあるが，中村ら（2011）の投動作様式の発達を参考にとると，年少児ではパターン1，年中児，年長児では共にパターン2またはパターン3の出現が多くみられ，パターン4以降の動作出現割合は僅かしか見られないことがわかる。このような投動作の発達は主にテニスボールやソフトボールなどの片手で握るボールを対象としている。しかしながら，幼児期から児童期に移行すると体育の授業でドッジボールやポートボールなど片手では扱いにくい大きいボールを使用してボール投げゲームが行われるようになる。幼児期から小学校低学年の段階では，大きいボールに対して両手で投げる傾向にあり（加藤・添野，2013），ボールの大きさによって投動作様式の発達も変わることが推測される。

捕球動作の発達については，宮丸（1980b），宮丸ら（1981），中村ら（2011）の幼児期から児童期を対象とした研究が挙げられる。これらの先行研究における捕球動作の発達段階のキーカテゴリーは，ボール飛来前の準備時点における腕の動作，捕球時点における腕の動作とされており，幼児期の捕球動作の発達を評価する指標とされている。宮丸（2011）によると，飛来するボールに対する逃避反応や捕球時のボールに反応した腕の動作がない初歩の未熟な動作（パターン1）から，両腕と上体を使ってボールを抱え込むように捕球する動作（パターン2・3）へと移行し，最終的に手掌で捕球する成熟型の動作（パターン4・5）へと発達する過程が示されている（図2）。これらの発達段階が幼児期のどの年齢で現れてくるのか，経験による個人差はあるが，中村ら（2011）の捕球動作様式の発達を参考にとると，年少児，年中児ではパターン1またはパターン2，年長児ではパターン2またはパターン3の出現が多くみられ，パターン4以降の動作出現割合は僅かしかみられないことがわかる。捕球は，時間や空間の概念形成の発達や視覚を通した空間認知能力の発達により可能になる。捕球動作はボールの軌道を捉える視覚情報とそれに対応する手や腕の捕球動作が正確に合致すること，つまり目と手の協応能力が高まることによってより正確に小さなボールでも捕球で

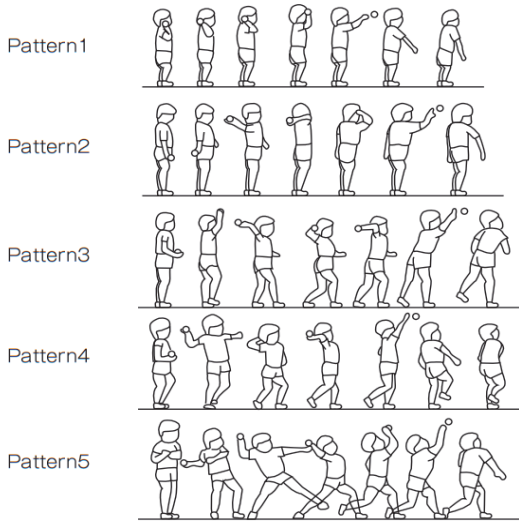


図1. 投球動作発達の様式 (中村ら, 2011, p.7)

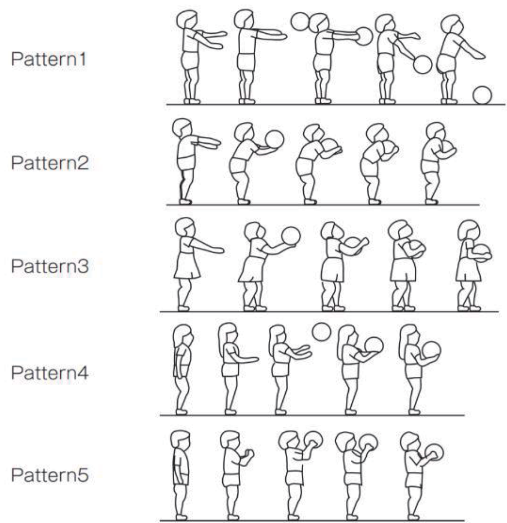


図2. 捕球動作発達の様式 (中村ら, 2011, p.8)

きるように発達していく (宮丸, 2011)。

このように投動作と捕球動作の発達が段階的に示されたことは、現場で子どもの観察や指導をする際の指標になる。幼児期からのボール投げゲームを想定する場合、止まっている的や動動的を狙って投げたり、味方にパスをしたりという投能力は、加納ら (2016) の研究からも4歳半以降に精度が上がることを示されている。一方、捕球に関しては、動きの中で味方からのパスを正確にキャッチすることは幼児期ではかなり難しいと考えられる。とりわけ、4歳頃は捕球動作を含んだ対面式のボール遊びよりも標的に対して狙ってボールを投げる的当て遊びの方が有効だと示されており (加納ら, 2017), 5歳以降に捕球動作を含んだボール遊びが徐々に可能になると推測される。ボールの大きさについては、投球の際はテニスボールのような小さいボールの方がしっかりと握ることができ、コントロールも大きいボールに比べ容易であると考えられる。また、ボールが大きいと両手で投げる頻度も多くなる可能性がある。一方、捕球の際は空間を飛来するボールは大きいボールの方が小さいボールに比べ容易であると考えられる。これは、ボールに対して空間を捉える範囲が低年齢ほど大きく、手掌でボールを捉えるには小さい範囲でとらえることが必要であるためである (宮丸, 1981)。これらのことを踏まえ、幼児期から児童期にかけて行うボール投げゲームでは、片手での投球や捕球可能な大きさのボールで、尚且つ握れるようなボールを選択する必要がある。また、5

歳児頃から捕球動作が獲得されてくることを考慮して、徐々に捕球技能がもとめられるような教材開発も必要とされている。

3. 投運動に関する幼小接続カリキュラムの課題

幼小接続が意識された、投・捕球動作を学習するボール投げゲーム教材としては、投・捕球動作を含んだ多様な動きをつくる教材や投・捕球動作に焦点化したいくつかの運動プログラムが見受けられる (豊田, 2009; 赤木ら, 2016; 三輪ら, 2019; ; 大坪・春日, 2019)。しかし、これらの研究においては、投・捕球能力を向上させるプログラムが開発されているものの、小学校におけるボールゲーム教材への発展については明確にされていない。幼小接続の観点に立つならば、特定の運動能力を向上させる運動プログラムだけではなく、その後の発展を見通した系統的な運動教材の開発が求められると考える。また、小学校では、多様な幼稚園等から児童が集まるため、幼少共通に実践されている種目に着目して教材が開発されていくことが望ましい。そうすることで、小学校と幼稚園等においてカリキュラムが共有しやすくなり、ボール投げゲーム教材における幼小接続カリキュラムを編成していく際の足場を築くことができると考えられる。

II. 本研究の目的

以上より、本研究においては、運動学習の課題がみられるボール投げゲームの共通教材に着目し、幼小接

続カリキュラムの課題を解明することを目的とする。対象となるボール投げゲームは、攻防入り乱れ型のゴール型ゲーム教材であり、片手での投球や捕球する機会が得られるシュートボール教材とする¹⁾。以下では、幼児期の運動遊びの指導（以下、これを幼児体育とよぶ）と小学校低学年の体育指導（以下、これを小学校体育とよぶ）を比較しながら、シュートボール教材の特性や指導の工夫について検討した上で、幼小接続に向けたカリキュラム上の課題を検討する。なお、分析対象は、学校体育研究同志会にて蓄積されてきた実践資料を中心とする。

Ⅲ. シュートボールの特徴やねらい

1. 基本のルールや教材の価値

シュートボールは、1967年から岡田和雄・平林信也によって研究が開始され、ドッジボールにかわるボール運動教材として開発されたものである（平林，1989）。シュートボールの特徴としては、敵と味方の2チームにわかれて、自分たちの的を守ったり、相手の的にボールを当てて倒したりするゲームである。ボールを手でもって走ることができ、ドリブルによるプレイの困難さを解消し、シュート局面での攻防戦術・技術の学習に焦点化させることができる。コートは図3のように距離をおいた的を設置し、的の周囲にキーパー以外の人がはいれないゾーン（ディフェンスエリア）を設定する。

玉腰（2020）は、シュートボールの小学校低学年における教材的価値として、①運動遊びの要素を導入できる、②ルールや道具を変化させて多様な競技形態を創造でき、子どもたちの発達段階や要求に合わせて柔軟なルールづくりができる、③ゴール型ボール運動の基礎となる、シュート局面を中心とする戦術や技術を学習できる、④グループでの教え合いや協同的な探求

がしやすい、という点をあげている。これらは、幼児体育においても共通する観点が多いと考えられる。小学校低学年向けの教材として開発された経緯もあり、幼児体育においても普及し、独自のルールをもつ当てゲームへとつくりかえられている（中瀬古，2013）。ただし、園独自の教材として類似のゲームが開発されたケースも存在しており（山本，1987；山本，2013）、多様な形態が存在すると考えられる。このことは、それだけ自由度の高いルールで構成されており、扱いやすい教材であることを示唆している。このように、シュートボール教材は、幼児期から小学校低学年までの発達段階における適切な教材として実践されている。

2. シュートボールの戦術・技術学習におけるねらい

学校体育研究同志会は、幼児期は神経系の発達が旺盛な時期であり、6～7歳ぐらゐまでに大人が行う運動や動作の種類がおおよそできる水準に達することを考慮して、バランスのよい運動経験を3つの運動能力の獲得という視点から整理している。それは、①姿勢を操作したり、移動したりする運動能力、②物を操作したり、物や人の動きを予測・判断したりする運動能力、③スピードやリズムをコントロールできる運動能力である（口野，2010）。これは、小学校への接続も視野にいれた教材の多様化と系統化を導出する視点となっている。上記の目標をふまえると、シュートボールにおいては、主としてボール運動で獲得をめざす「物を操作したり、物や人の動きを予測・判断したりする」ことを養える。また、シュート姿勢や防御を突破する動きや走りながらボールをパスする動きなどは、「姿勢を操作したり、移動したりする」ことおよび対戦相手の動きに応じて「スピードやリズムをコントロールできる」ことを養える。

こうした運動能力を獲得する上で、シュートボール

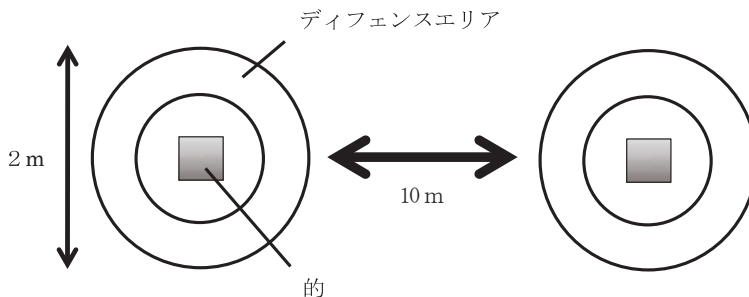


図3. シュートボールのコート例（玉腰，2019，p.154より筆者修正）

における戦術・技術学習の中心的なねらいは、シュートする技術や戦術にあり、これは、幼児体育および小学校体育において共通している。シュートボールにおいては、対戦形式をとり、いかに防御を突破して目標とする的にボールを当てるのかをめざす。その際、相手の防御を突破するための個人戦術（フェイント動作など）や的に当てるための投球技術がもとめられる。また、人数が増加してくると仲間を生かして防御を突破する連携プレイがもとめられ、投・捕球の技術や基礎的なグループ戦術を学習させられる。これらはのちのハンドボールやバスケットボール、そしてフラッグフットボールなどのゴール型ボール運動に接続していく要素をもち、ボール運動における汎用的なスキルを学習することができる。

また、シュートボールは、シュート機会や簡単な作戦づくりを保障し、ゴール型ボール運動のおもしろさを味わうこともできる。シュートボールが開発された経緯において重視されたのは、「2人のコンビネーションによるパス・シュート」という基礎的な戦術を学習することである。荒木（1967）は、実際のゲームに生きる指導系統を構築するためには、運動を個別の要素に分解するのではなく、単位として把握すべきだと主張している。そして、ボール運動においては、おもしろさの中核である得点プレイをめぐる2人のコンビネーションが基礎的な戦術として学習され、その基礎が発展していくように指導系統を構築することを提案している（森，2010）。そのため、シュートボールにおいては、「2人のコンビネーションによるパス・シュート」が基本の戦術となり、中核的な学習内容として位置づけられている（山本，2013）。この基礎戦術が成立するようになり、連携プレイを含む作戦づくりを探求することで、ゴール型のおもしろさを味わうことができる。

3. シュートボールにおける組織・運営の学習のねらい

体育科教育は、学校卒業後においても、自分たちで民主的にスポーツ活動を実践していくための組織・運営能力の学習も重要なねらいとなる。自分たちで運動の課題を発見し、合理的な解決方法を探求していく方法や、自分たちでゲームや大会を組織・運営していく方法、そして、みんなが楽しめるルールへとつくりかえていく方法などは、スポーツを「する」「みる」「支える」「つくる」といった多様なかかわり方を学習する上でも重要な学習内容となる（出原，2004）。そのため、シュートボール実践においても、組織・運営の

学習目標が設定されている。たとえば、自分たちで運動の課題を発見する方法として、ゲーム記録が活用されている（図4）。ゲーム記録を活用することで、みんながシュートを打ち、成功しているかが分析され、シュートがまだ打てていない子や成功していない子をうまくするための練習や作戦づくりなどの課題解決学習を組織することができる。また、ゲームの運営についても、ルールがわかり、必要な準備がわかれば、幼児期においても自ら積極的に準備をするようになったり、自分たちで公平なメンバーとなるようチーム決めをしたりすることができる（山本・脇田，1995）。このように、組織・運営の学習のねらいを達成するために、自分たちで学習を進行する自治的な学習集団を形成する指導方法が重視されているのである（出原，2004；中瀬古，2013）。

シュートボールにおける組織・運営の学習は、小学校体育の目標となる3つの資質・能力（「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」）を形成する上で重要となる。特に、自分たちで運動課題を発見し、解決しようとするのは、「思考力・判断力・表現力等」や「学びに向かう力・人間性等」との関連をもつ。こうしたねらいは、幼児体育においても同様の特徴をもつ。幼児教育の目標は、5領域（「健康」「言葉」「環境」「人間関係」「表現」）で構成され、これらは「遊びを通じた総合的な指導」によってその達成がめざされる（文部科学省，2017b）。そのため、運動遊びでトラブルが発生した際には、保育者の支援によって子どもたちの気持ちを言葉で表現させ、お互いの気持ちを理解した上で、その解決方法となる新しい技術やルールを考えさせるといった指導が大切にされる（山本・脇田，1995）。小徳ら（2005）や沖中ら（2006）は、「人間関係」領域の学習に着目して、5歳児的当てゲームの指導過程を分析している。そして、的当てゲームは、非日常的な活動となり、子どもたちが自己の思いや願いを主張する機会が得られやすく、「自分だけがたくさんのを倒せばよい」という自分本位の考え方ではなく、班のことや仲間のことを考えられるようになった」（沖中ら，2006，p.190）事実がみられるなど、人間関係を調整する能力の育成に効果があることを解明している。このように、幼児体育および小学校体育においては、目標の把握の仕方は異なるが、両者ともに組織・運営面の学習が重視されている。

得点記録

12/15 ① B 4判の紙

	きいろ	しろ
1		
2		
3		
4		

各チームが得点すると○印を書き入れ、○の数をかぞえて合計点とする。
問題点：用紙が小さく見えにくい。誰が得点したか不明。

3/1 ② カレンダーの用紙

	きいろ	しろ
	-00	-00
	-00	-00
	-0	-0

名前を書き、誰が得点したか○をつける。

3/14 ③ 黒板

	きいろ	しろ
1		
2		
3		
4		

自分たちで名前を書き、誰が得点したか○をつける。
卒園の時は、前もって3人組の名簿を子どもたちが作り、黒板に貼った。

○ゲームのきろく ○ [ピカチュウ] チーム 1月26日 (月)
たい (ドラえもん) チーム ●アナウンサー わたる ●きろく しおり

(せんはん)

No.	なまえ	○…シュート	○…シュートせいこう	○	○
1	けいすけ	○○○○		2	3
2	あき			0	0
3	まさみ	○○		2	0
4	たつや	○○○○		3	1

(こうはん)

No.	なまえ	○…シュート	○…シュートせいこう	○	○
1	けいすけ	○○○		2	1
2	あき	○○○		2	1
3	まさみ	○○		1	1
4	たつや	○○○○		3	1

はんせい・かんそう

せんはんは、あきさんがシュートがうてませんでした。まさみさんもシュートはしましたが、せいこうしませんでした。でもこうはんは、さくせんがせいこうして二人ともシュートがせいこうしました。みんなでシュートがせいこうできてよかったです。

せんせいから

ぐるぐるさくせんがせいこうしましたね。ボールをとってからのこうげきをもっとはやくすると、またせいこうするかもしれないよ。

図4. シュートボールにおけるゲーム記録例 左図：幼児（山本・脇田，1995）右図：低学年（松崎，2009）

IV. 幼児体育と小学校体育における指導の特徴

1. 準備段階の指導

ボール運動は対戦相手と競争するため、状況判断をとともなう戦術的行為が必要となる。その到達点として、「2人のコンビネーションによるパスシュート」が位置づけられているが、連携プレイが成立するためには、スペースや仲間の位置を把握したり、ボールや相手の動きを予測したりする認知能力や、目標に向かってボールをコントロールして投げたり、ボールをキャッチしたりする投・捕球技術の獲得が必要となる。そのため、幼児体育および小学校体育においては、シュートを中心とする投・捕球技術を獲得するための教材から、次第にゲームへと発展させていくための系統的指導を実施している。

脇田実践（山本・脇田，1995）では、忍者になりきって飛び箱からジャンプしたのちに、友達からボールをパスしてもらい、的をめがけてボールを投げつける遊び（忍者跳び的当て）、コーンを的にしてボールを投げ当てて倒すゲーム（シュートゲーム）、上手投げの指導（両手で頭の上から投げる、肩から投げる）とシュート練習といった段階を踏んでいる。また、こうした遊びや練習と並行して、鬼遊びを実施し、「物や人の動きを予測・判断する能力」を獲得させたり、鬼遊びをチームでの対戦形式にして戦術的な攻防を経験させたりしている。その後、本格的なシュートボールへと発展していく指導系統である。山本（2013）の報告においても、多様なボール操作に慣れる（投・捕）、

力強い投げとねらった投げの違いに気づかせて色々な投げ方を楽しむ、ねらった的にボールを当てるシュートゲーム、対戦形式で仲間にパスをしたり、相手を避けたりしながら二重円の中央にある的をめがけて投げるシュートゲームを実施し、本格的なシュートボールへ発展していく指導系統となっている。こうした指導系統は、基本的には小学校体育と同様であり、ボール慣れやシュート技術を準備段階として学習させることにねらいがある。

しかし、幼児体育は、小学校体育のように必ずしも特定の時間に運動遊びをするわけではない。幼児教育においては、子どもたちが興味をもって自ら対象に働きかけられる場や活動を組織する「環境を通じた教育」が指導の原理となっており、そこでは上述した「遊びを通じた総合的な指導」の方法がもとめられている（文部科学省，2017b）。幼児は、遊びに夢中になり、対象に働きかけることを通して、物事の特徴を理解したり、試行錯誤しながら人や物との多様なかかわり方を学習したりすることになる。そして、遊びに夢中になるためにも、保育者は自発的な遊びや、目的や見通しをもった遊びとなるように支援することがもとめられる。そのため、脇田実践（山本・脇田，1995）の例にみられるように、異なる運動遊び（忍者ごっこ）をする際に、ボール投げゲームにつながる遊びを入れ込んだり、ボール投げゲームをする際は子どもたちのその日の様子を踏まえて保育者がタイミングを見計らって実施したりしている。幼児体育においては、教材の組み合わせや、子どもたちの自発的な活動となるよう

ボールゲームの系統性を構築していくことがもめられる。

2. ゲームにおける初期の指導

A 保育園では、過去の実践例から3対3が適正人数として考えられるようになってきている。そして、最初のゲームでは生活班を基本として4～5人で対戦することから始め、徐々に3対3のゲームへと発展させている。小学校体育では1対1のゲームから始め、発展させていくことが多く、最初のゲーム人数には指導の差異がみられる。A 保育園の報告では、なぜ4～5人のゲームから始めるのか明確な理由は明記されていないが、生活班を基本としていることから(山本・脇田, 1995)、子ども同士の関係性がつくれ、安心して参加できるというねらいがあると思われる。また、別園でのシュートボール実践では、「一斉に個人個人が行うと目が届きにくいし、順番にすると待っている時間が長くなり、集中力が切れてしまう」(竹内, 2006, p.12)といった保育者の考えが提示されており、1対1にすると保育者の観察や幼児の集中力において課題があると考えられる。実際に活動しながら経験的にルールを理解し、活動の見通しをもてるようにしているのであろう。一方、小学校体育においては、短い単元で児童全員が目標とする認識・技能を獲得するために、全員がゲームの中でシュートする学習機会を保障することが重要視されていることが考えられる。

こうした差異は、幼児体育と小学校体育の目標設定の差異にも要因があると考えられる。幼児教育において、5領域の目標は、具体的な望ましい経験が「方向目標」として提起されている(文部科学省, 2017b)。心身の健康に関する「健康」領域においては、「健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う」(文部科学省, 2017b, p.3)ことを目標としており、具体的なねらいとして「(1)明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう。(2)自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする。(3)健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付ける」(文部科学省, 2017b, p.3)ことがあげられている。一方、具体的な到達目標をもつ小学校体育においては、発達段階に応じた学習保障やその評価がもめられており、教師が指導性を発揮する場面が多くなると考えられる。小学校体育においても、幼児体育と同様に、自分たちで鬼やモンスターの的をつくったり、物語の主人公になりきっての倒そうとしたりする運動遊びが実践されているが、定められた時間内に必要な経験や学習が保障

されるように、ゲーム段階では少人数から始めていると考えられる。

3. ゲームの発展過程の指導

幼児体育と小学校体育においては対戦人数の始まりは異なるが、そこから2～3人のゲームへと発展していく指導方法は共通点が多い。特に、中心的な指導方法として共通しているのは、困り事やトラブルを契機として、戦術・技術的なポイントを発見したり、対話と合意によるルールづくりをしたりすることである。5～8歳頃はまだ自己中心性が残っており、一度に多くのルールを提示しても理解することができず、シュートしたい気持ちが上回り、ワンマンプレイが出現したり、ルールを遵守できなかつたりすることが多い。そのため、最初は自由度が高い状態でゲームを開始し、その中で生じた困り事やトラブルを契機にして、戦術・技術的なポイントやルールづくりをすることで、納得して活動に参加できるようになることをねらっている。

この点、シュートボールはルールの自由度が高く、様々な条件をプレイヤーの考えによって作りだしていくことができる。また、ルールによってひきだされる動きも変化するため、保育者・教師は子どもたちとルールを合意するだけではなく、意図的にルール変更をさせることで、目標とするゲーム形態へと到達するようにしている。表1は、シュートボールの実践資料(植松, 1992; 脇田・山本, 1995; 小俣, 1997; 森田, 2002; 岩崎, 2005; 久保, 2005a; 松崎, 2009; 川口, 2017)から、主なルール変更とそのねらいを整理したものである。ルール変更の視点は大きく、ボールの質、的の重さ、的の大きさ、コート大きさ、倒れた的を修復する人の動き、得点後のくぎり、シュート時間の制限、キーパーの有無、パスルールの有無など様々である。このように、様々なルール変更を柔軟にしていけるため、5～8歳の子どもの自由で自分たちのシュートボールをつくりあげることができる。

ただし、最初のルール設定においては、幼児体育は運動遊びから次第にボールゲームにしていくために、小学校体育よりも自由度が大きい。たとえば、脇田(山本・脇田, 1995)は、5歳児のシュートボールの実践を終えたのちに「ルールづくり・12のステップ」として、ルールづくりを系統性の柱とする次のような実践プランを提起している。①ゴールに当たれば1点、②ゴールを動かさない、③ゴールにはさわらない、④

表 1. シュートボールにおけるルール変更とねらいの例

ルール	変化	効果	ねらい
ボールの質	硬め	ボールをつかめない	・ボールを離すタイミングが難しくなり投動作の課題が発展する。 *片手でうまく投げられない子は両手でシュートすることになる
	柔らかい	ボールをつかめる	・片手でシュートしやすい
的の重さ	軽い	シュート成功率の増加	・シュート力がない子のシュート成功率の向上
	重い	シュート成功率の低下	・強くボールを投げるシュートを引きだす
的の大きさ	大	シュート空間（重要空間）の拡大	・シュート成功率の向上 ・シューターに対する2人での守り（プレス）の出現・活用（そこからパスの出現・活用）
	小	シュート空間（重要空間）の縮小	・1：1局面での隙をつくるフェイント動作を引きだす ・パスの出現・活用 ・シューターに対するマンツーマンの出現・活用
コート大きさ	オールコート	攻防の切り替えがある（攻防切り替え型）	・ゲームに多様な場面が生じ複雑さが増す ・速攻の出現・活用
	ハーフコート	攻防の切り替えがなくなる（攻防分離型）	・遅攻が多くなる ・状況や役割が定まりやすく学習がしほりこみやすい
的の周囲の円の大きさ	大	シュート位置と的の距離が長くなる	・ボールコントロールが必要になる ・ディフェンスを上からかわしてシュートしやすくなる
	小	シュート位置と的の距離が短くなる	・強いシュートがしやすくなる ・ディフェンスを左右や下からかわしてシュートしやすくなる
倒れたゴールをなおす人	シュートした人	1人ディフェンスが遅れ、オフェンス有意となる	・速攻によるシュート成功率の向上 ・速攻による数的優位の出現・活用
	他の人	シュート後、すぐにディフェンスにもどれる	・オープンナンバーで攻防する機会が多くなり、作戦を使用した攻防が必要となる
得点後のくぎり	くぎり	あらかじめディフェンスポジションにつける	・速攻プレイがなくなる ・作戦を使用した攻防が必要となる ・同じ状況からスタートのためわかりやすい
	くぎりない	シュート後にディフェンスが手薄になる可能性がある	・速攻プレイの出現・活用 ・運動量の確保
シュート時間の制限	制限する	時間内にシュートをしなければならなくなる	・すばやい作戦の実行が必要となる（速攻の出現） ・シュート機会の保障
	制限しない	じっくりと攻めることができる	・作戦をなんども実行することができる（シュート数の減少）
キーパーの有無	あり	キーパーの隙をついたシュートが必要になる	・1対1でのシュート技術の習得が必要となる ・ハンドボールのシュート局面に接近する
	なし	フリーになればシュートが可能になる	・シュートの成功率が上昇する
パスルールの有無	あり	個人プレイが多くなる	・ボールをもったら積極的にシュートをめざす ・ワンマンプレイが出現する可能性がある
	なし	パスプレイが多くなる	・パスシュートの出現・活用を促進する （ルール例）1人がシュートしたら、チームの他の子全員がシュートしなければもう1度シュートできない/1回目のシュートは高得点/全員シュートできたらその回数分+得点が高いなど

1点を入れたら相手ボールとする、⑤1点入れたらゴールから相手ボールとする、⑥相手をたたいたり、つねったり、乱暴してはいけない、⑦人数を5人から4人にする、⑧ゲーム時間を3分とする、⑨ゴールエリアをつくる、⑩人数を3人にする、⑪コートをつくる、⑫コート外へでたボールはその場から、得点が入り相手ボールとなったときはゴール線外よりスローイン。このうち、②は、的にしがみついて守ろうとする幼児の姿を想定しており、③はボールを保持したままに何度もボールを当てて連続得点しようとする幼児の姿を

想定している。こうした事例は、小学校低学年であまり報告されていない。このように、幼児体育においては、より自由な状態から始め、様々な観点からルールづくりを行うことになる。小学校体育においては表1に整理したような戦術・技術学習との関連性が強いものをルールづくりの対象にする場合が多い一方で、幼児体育においては運動遊びとしての活動を大切にするため、様々な観点からルールづくりがなされ、「遊びを通した総合的な指導」が実施されることになっている。

V. シュートボールにおける連携プレイの学習時期をめぐる議論

1. 小学校体育における多様な議論

小学校体育において開発され、普及したシュートボールであるが、そのカリキュラム上の位置づけについては様々な意見が提起されている。特に、低学年の段階で「2人のコンビネーションによるパス・シュート」をいつから、どこまで学習目標にしていくのかについては意見がわかれている。安武 (2013) によると、荒木 (1967) による基礎技術規定における「最初から最後まで質的に発展し高められていくような内容をもった技術」(p.295)²⁾ という項目の「最初から」という規定がいつからなのかという問題が存在しているという。実践者によっては、1年生でもコンビネーションを学習の対象にするものもあれば (植松, 1992; 森田, 2002; 蟻川, 2013), 1年生はシュート技術や攻防の切り替えなどの基礎的な運動感覚を獲得させることをねらう実践もある (鳥越, 2012)。さらには、学校体育研究同志会の兵庫支部による集団研究においては、低学年は、自分とボールやとの関係は理解できても、味方や敵の動きまでは認識できにくいという実態をふまえ、「ボール運動のおもしろさの中心であるコンビネーションからの攻撃については、この時期の子どもの発達段階から考えると意図的に取り入れていくことは無理があると思われる。パスを使う攻撃を中心に扱うのは中学年以降にゆずり、この段階ではできるだけ自分がボールに触れ、数多くシュートするおもしろさを味わわせることである。コンビネーションに関しては、シュートのこぼれ球がどこでとりやすいのかがわかり、うまく処理していくような力をつければよいと考える」(久保, 2005b, p.8) といった主張がなされている。しかし一方で、大貫・河野 (2005) は、シュートボール実践において、低学年の子どもは、「逆サイド空間の有効性」に気づき、逆サイド空間を使用した攻撃やその阻止が可能であること、2年生では教師の助言がなくても「反対側空間の重要性」に気づき、逆サイド待ちプレイが出現することを報告している。このことは2年生でパスの有効性を理解することが可能であることを意味する。また、安武 (2013) は、「シュートを意識した中でボールと人 (敵・味方) の動きの予測判断 (空間的・時間的) が必要となってくる『2人のコンビネーションによるパス・シュート』が、低学年期の児童にはかなりハードルが高いものであることはまずしっかりと認識しておかなければなら

ない」(p.40) と述べる。その上で、幼児体育でも、「パス・シュート」のコンビネーションが成立している実態や、低学年でも集団的なプレイを学習の対象とすることで苦手な児童の多くが楽しめるようになったり (蟻川, 2013), 手渡しパスなどのパスプレイが成功したときに歓声が上がったり (東條, 2013) する事例に注目し、コンビネーションを指導することの重要性を指摘している。そして、『コンビネーション』に向けて教える中身を整理することも今後の実践上大切になると思われる」(p.40) と課題を提起している。また、玉腰 (2019) は、1年生では必ずしも「パス・シュート」を学習の対象にしないことを想定して、「低学年の出口像として、シュートできない状況を克服するために、スペースでパスを受けてシュートするコンビネーション攻撃にも挑戦させていきたい」(p.155) と主張している。

こうした小学校におけるシュートボールの系統性に関する議論をふまえると、幼小接続カリキュラムを編成する上では、幼児体育および小学校体育における「2人のコンビネーションによるパス・シュート」をいつ、どのように学習の対象にしていくのかを解明することが研究課題となる。

2. 幼児体育における連携プレイの指導内容

上述してきたように、A 保育園では、「パス・シュート」の学習を目標として、シュートボールを実践している。これは、5歳児においても「パス・シュート」の学習が可能となることを提起するものであるが、その指導過程においては長年の研究の蓄積が見られる。まず、上述したように、A 保育園では運動遊びのカリキュラムが構築されており、多様な運動遊びを通して系統的にボール投げゲームに必要な運動能力を獲得させている。また、実践は、的当てが11月～12月上旬までに4回実施し、その後3月中旬までのシュートボール段階で14回実施するなど、長期にわたる学習保障がされている。そして、その指導過程においては、上述したルールづくりの指導系統だけではなく、戦術・技術学習の指導系統も研究がなされている。山本 (2013) は、シュートボールにおいて「パス・シュート」が成立するための指導過程について分析している。特に、山本 (2013) が着目するのは、ゲームの段階における、「パス・シュート」練習の指導内容についてである。

A 保育園では、図5のように、2対0の練習で「パス・シュート」の連携プレイを学習させる。この時、

BはA'よりも斜め前の位置でパスをだし、ボールが前方からくるように工夫をしている。もしBの位置がA'よりも後ろにいと幼児は捕球することが困難になるという。そのため、斜め前からパスがくるように練習方法を工夫している。利き腕に合わせてBの位置も移動するため、Bは最初に保育者が実施し、徐々にAもBも両方子どもたちで実施できるように練習をするという。その後、2対0の練習は2対1の練習へと変化させ、「Aはどの空間にどのようなタイミングで走りこめばパスをもらえてシュートできるかという予測・判断が求められ、さらにパスを出すBも動かずにパスを出すのではなくAの動きに応じて動きながらどのタイミングでパスを出せばいいのかという予測・判断が求められることになる」(山本, 2013, p.35)という。そしてこの練習は、ゲームにおいて「パス―シュート」が成立しやすい三角形のフォーメーションの学習とも関連していく。

ゲームの経験が豊富になってくると、逆サイドの有効空間に気づき、図6のように、的を中心に三角形のフォーメーションをつくるチームがでてくるという。これは子どもたちが発見する「パス―シュート」の初期の形態と考えられる。最初はシュートミスしたのちにボールが転がっていくので、それを仲間チームが拾

いシュートする動きがでる。その後、ディフェンスをかわしてシュートする有効性に気づきはじめ、図6のように三角形の形をとる。A保育園ではこの三角形のフォーメーションをとることができるよう、プレイを再現させたり、プレイを止めて動きを確認したりと指導をしていく。また、ビデオの分析・話し合い・振り返りを実施し、「三角形になっている場面」や「シュートできない時にパスをだす場面」、さらには「パスが出せない時の動きの場面」、「パスをしたあとどこに動けばいいかわからない場面」、「ゲームに勝てないとわかり、途中でいいかげんなプレイになり意味がないパスを出した場面」などを意図的に着目し、戦術的なポイントに気づかせる指導を展開している。

このように、A保育園では、運動遊びのカリキュラムを構築して長期にわたり指導時間を確保しているとともに、その上で、ボール投げゲームの指導内容や方法を緻密に系統化することで、5歳児における「パス―シュート」の連携プレイを可能にしている。こうした先駆的な事例を参照しながら、それぞれの園でもカリキュラムや指導系統の観点から運動遊びの指導を検討し、「パス―シュート」を可能にする指導系統のあり方を解明していくことが課題となる。

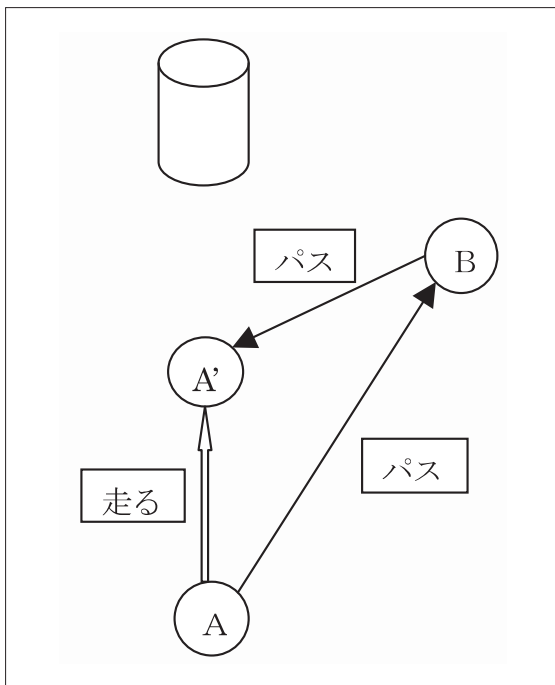


図5. パス―シュートの練習方法 (山本, 2013, p.34)

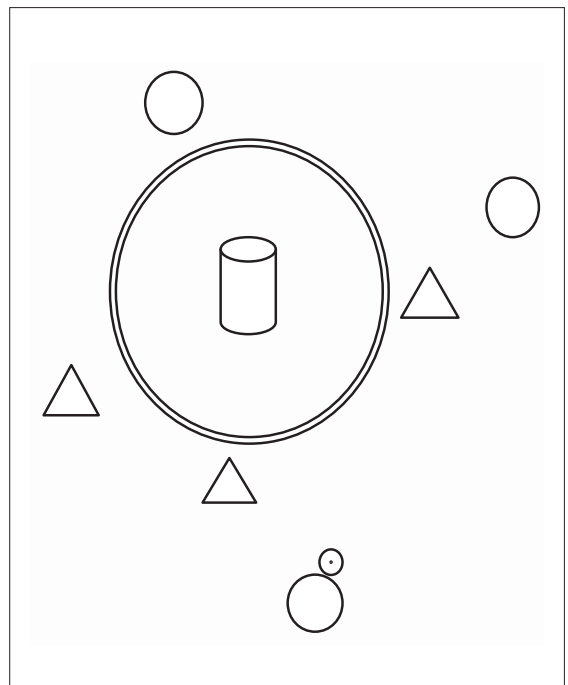


図6. 三角形をつかった攻め (山本, 2013, p.35)

VI. シュートボールにおける幼小接続カリキュラムの課題

近年の運動能力調査の研究においては、投・捕球能力が低下傾向にあり、その中で片手での投球や捕球動作の経験を保障するようなボール投げゲーム教材を実践することがもとめられる。また、投・捕球動作の学習に焦点化した運動プログラムだけではなく、その後のボールゲームへ発展する教材で、幼小接続カリキュラムを検討することがもとめられている。さらに、小学校には様々な幼稚園等から子どもたちが集まるため、運動遊びの幼小接続カリキュラムを構築するためには、共通教材を扱うことが有効となると考えた。そこで、本研究では、幼小の共通教材である、攻防入り乱れ型のシュートボール教材に着目し、幼児体育および小学校体育の実践を比較することで、幼小接続カリキュラムを構築する上での課題について考察した。

結果、幼児体育および小学校体育においては、シュートボールの中心となる戦術・技術学習上のねらいや、組織・運営の学習上のねらい、ゲームを進展させる指導方法については共通点が多くみられた。こうした共通点からは、幼小接続期のカリキュラムを編成していく可能性が示唆されている。一方で、系統的指導については、幼児体育が4～5人の対戦から開始するのに対して、小学校体育では1対1の対戦から開始している点に差異がみられた。この理由として、幼児体育においては、幼児が安心して学習できたり、集中できたりする環境づくりがもとめられるためであることが考えられた。また、幼児体育は運動遊びの時間が固定されておらず、「遊びを通した総合的な指導」がめざされることから、多様な運動遊び教材での組み合わせをふくむ指導系統が構築されていた。小学校体育では到達目標による学習保障と評価の必要性から、定められた時間内で1人ひとりに確実にシュート機会が保障されるために、小人数から発展させていると考えられた。このことから、幼小接続カリキュラムにおいては、単線的な指導系統ではなく、幼児体育と小学校体育それぞれのカリキュラムや指導の工夫をふまえた系統性を解明する必要性が示唆される。

そして、小学校体育におけるシュートボール教材に関する議論からは、幼小接続カリキュラムを構想する上で課題がみられた。それは、戦術学習上においては、「2人のコンビネーションによるパスシュート」をいつ、どこまで学習させるのか、その見通しをカリキュラムの観点から解明することである。特に、安武(2013)

が述べるように幼児期だけではなく、小学校低学年でも連携プレイの学習は高度であることが指摘されており、系統的な指導内容や指導方法がともなわなければ到達は困難なものである。様々な幼稚園等や学校の実態を想定したとき、単純な接続カリキュラムではなく、柔軟に幼稚園等や小学校の実態をふまえて接続を構想できるような視点を確立することが課題となる。たとえば、幼児期においては2人のコンビネーションの水準を初歩的なものと位置づけ、シュートボールに発展する前段階の的当てゲームを目標とするなど、実態をふまえてカリキュラムを編成可能にすることも必要であろう。

そこで、今後は次の2つの視点で研究を進展させていくことがもとめられている。1つは、幼児体育や小学校体育において「2人のコンビネーションによるパスシュート」がどのような指導過程の中でどれだけ獲得できるのかを解明することである。もう1つは、柔軟に幼小接続カリキュラムを編成できるようにするため、的当てゲームからシュートボール教材の多様な発展過程や接続のあり方を解明することである。

注

- 1) 本研究においては、パスボール(山本・脇田, 1995)やドーナツボール(小徳ら, 2005)やシュートボール(松崎, 2009)といった名称で実践される類似したボール投げゲームを総称して、シュートボール教材と表記する。
- 2) なお、荒木(1967, p.295)は、系統的指導の中核となる「基礎技術」を次のように規定している。(1)学習する運動文化の本質(特質)を形成している最小単位の技術(特質を失わない範囲で単純化した技術)。(2)最初に練習し、最後(ゲーム)まで質的に発展する(発展的解消)内容をもった技術。(3)学習する運動文化の技術習得については、誰もが必ず体験し習得しなければならない技術。(4)ある程度の運動量を有し、児童・生徒が興味をもって、容易に習得できる技術である。

引用文献

赤木信介・田部絢子・石川衣紀・内藤千尋・高橋智(2015) 就学前教育と小学校の接続・連携に関する調査研究－「松江市保幼小接続カリキュラム」の検討を通して－. 東京学芸大学紀要総合教育科学系Ⅱ, 67:

- 53-68.
- 荒木豊 (1967) 運動文化の基礎技術と技術学習の系統性. 山梨大学教育学部研究報告, (18): 291-298.
- 蟻川智恵 (2013) 一年生のシュートボールで何を教えるのか. 学校体育研究同志会大阪支部編, KICK OFF, (42): 41-46.
- 出原泰明 (2004) 異質協同の学び—体育からの発信—. 創文企画.
- 岩崎英夫 (2005) 教科内容から教材・教具を. たのしい体育・スポーツ, 24 (2): 27-29.
- 植松和浩 (1992) シュートボールに取り組んで (小学校一年生の実践). たのしい体育・スポーツ, 11 (4): 18-20.
- 大坪健太・春日晃章 (2019) 幼小連携および接続に着目した年少から小学校低学年までの体系的な投運動プログラムの開発と効果の検証—ACPの概念を取り入れた投運動および捕球能力を向上させる運動プログラム—. 笹川スポーツ研究助成研究成果報告書, pp.220-226.
- 大貫耕一・河野聡美 (2005) 小学校低学年シュートボール. 学校体育研究同志会全国研究大会 (奈良大会) 提案集, pp.68-71.
- 沖中尚子・倉田直子・三谷友香・森岡咲 (2006) 就学前幼児の社会的発達を促す運動遊びについて. 県立広島女子大学生生活科学部人間福祉学科人間発達コース中瀬古哲研究室, 卒業論文.
- 加藤謙一・添野好正 (2013) 小学生におけるドッジボール投動作の発達に関する研究. 発育発達研究, (60): 14-23.
- 加納裕久・久我アレキサンデル・玉腰和典・丸山真司 (2016) 幼児期における定位能力・分化能力の発達の特性: 投・跳動作に着目して. 発育発達研究, (70): 36-47.
- 加納裕久・久我アレキサンデル・丸山真司 (2017) 幼児期の投運動における定位能力・分化能力の発達の特性—運動遊びの介入が与える効果に着目して—. スポーツ健康科学研究, 39: 9-17.
- 川口伸 (2017) 2人のパスワークで攻める学習 投げる力をつける小学校2年生のシュートボールの授業. たのしい体育・スポーツ, 36 (1): 34-39.
- 口野隆史 (2010) 幼児期の運動あそびのねらいと内容. 学校体育研究同志会編, みんなが輝く体育①幼児期運動あそびの進め方, 創文企画, pp.9-24.
- 久保雅一 (2005a) 2年生のシュートボール. たのしい体育・スポーツ, 24 (8): 12-15.
- 久保雅一 (2005b) 小学校低学年 児童の発達の特徴と授業づくりの課題. たのしい体育・スポーツ, 24 (8): 8.
- 国立教育研究センター幼児教育研究センター (2015) 幼小接続期カリキュラム全国自治体調査. (https://www.nier.go.jp/youji_kyouiku_kenkyuu_center/youshou_curr.html, 最終アクセス 2020年11月16日)
- 小俣三佳子 (1997) めざせ! 全員シュート成功—たのしいシュートボール—. たのしい体育・スポーツ, 16 (8): 32-35.
- 小徳由樹・杉真理子・月見智恵・松岡美奈子・山嶋衣理子 (2005) 就学前幼児の関係調整能力の育成に関する研究—5歳児の運動遊び実践の分析を中心に—. 県立広島女子大学生生活科学部人間福祉学科人間発達コース中瀬古哲研究室, 卒業論文.
- 竹内進 (2006) 山本実践を振り返って. たのしい体育・スポーツ, 25 (4): 12.
- 中央教育審議会 (2017) 幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申).
- 中瀬古哲 (2013) 子どもの発達と運動会—就学前体育カリキュラム論序説. かもがわ出版.
- 中村和彦・武長理栄・川路昌寛・川添公仁・篠原俊明・山本敏之・山縣然太郎・宮丸凱史 (2011) 観察的評価法による幼児の基本的動作様式の発達. 発育発達研究, (51): 1-18.
- 中村和彦・宮丸凱史 (1989) 幼児の捕球動作様式の発達とその評価に関する研究. 筑波大学体育科学系紀要, 12: 135-143.
- 平林宏美 (1989) 低学年体育研究の成果と課題. たのしい体育・スポーツ, 8 (2): 8-13.
- 玉腰和典 (2019) ゲーム/ボール運動. 木原成一郎ら編, 改訂版 初等体育科教育の研究. 学術図書出版社, pp.150-162.
- 玉腰和典 (2020) 幼児期の遊び (健康) から体育の学びへ. 松永あけみ・水戸博道・渋谷恵編 教育発達学の展開, 風間書房, pp.319-343.
- 東條憲二 (2013) 手渡しパスはコンビネーションの初期の姿か?. 学校体育研究同志会大阪支部編, KICK OFF, (42): 49-54.
- 鳥越陽子 (2012) 一年生シュートボールの実践. 学校体育研究同志会全国研究大会 (冬大会) 提案集, pp.67-70.
- 豊田直親 (2009) 小学校低学年における投能力向上の

- ための指導プログラムに関する検討. 早稲田大学大学院スポーツ科学研究科, 学位論文(修士).
- 福元真由美(2014) 幼小接続カリキュラムの動向と課題—教育政策における2つのアプローチ—. 教育学研究, 81(4):14-25.
- 松崎弥寿雄(2009) シュートボール. 学校体育研究同志会編 みんなが輝く体育②小学校低学年体育の授業. 創文企画, pp.104-113.
- 三輪佳見・野邊麻衣子・高橋武大・高橋祥朗・西田英司・馴松郁美・永江彩乃・中園雅貴・森崎由理江・日高正博(2019) 幼小中連携による体づくり運動の系統的指導. 宮崎大学教育学部附属教育協働開発センター研究紀要, (27):119-129.
- 宮丸凱史(1980a) 投げの動作の発達(投げの科学<特集>). 体育の科学, 30(7):464-471.
- 宮丸凱史(1980b) 子どもの動作の発達過程と練習効果—捕球動作について(子どもの発達と身体教育<特集>). 体育の科学, 30(1):21-29.
- 宮丸凱史(2011) 子どもの運動・遊び・発達の出来る子どもに育てる. 学研教育みらい.
- 森田康子(2002) みんなが楽しくできるゲームにシュートボールゲーム1年生. 学校体育研究同志会全国研究大会(熱海大会)提案集, pp.50-53.
- 森敏生(2010) ボールゲームで何を教えるのか. たのしい体育・スポーツ, 29(7):34-37.
- 文部科学省(2017a) 小学校学習指導要領(平成29年告示). (https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2018/09/05/1384661_4_3_2.pdf, 最終アクセス2021年1月23日)
- 文部科学省(2017b) 幼稚園教育要領. (https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2018/04/24/1384661_3_2.pdf, 最終アクセス2021年1月23日)
- 文部科学省初等中等教育局幼児教育課(2013) 平成24年度幼児教育実態調査. (https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2013/03/29/1278591_04.pdf, 最終アクセス2020年11月16日)
- 文部科学省初等中等教育局幼児教育課(2020) 令和元年度幼児教育実態調査. (https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2020/01/30/1278591_06.pdf, 最終アクセス2020年11月16日)
- 安武一雄(2013) シュートボールの実践課題. 学校体育研究同志会大阪支部編, KICK OFF, (42):31-40.
- 山本秀人(1987) 子どもたちと創りあげた「パスボール」. 青木一・深谷錦作・土田康夫・秋葉英則編, 保育幼児教育体系第3巻, 労働旬報社, pp.207-221.
- 山本秀人(2013) ボール運動で教えたい内容—「パスボール」の実践分析から—. 日本福祉大学子ども発達学論集, 5:25-39.
- 山本秀人・脇田順子(1995) だれでもできるすきになる 幼児の運動指導法. 旬報社.